

コミュニケーションに困難をもつ女子大学生へのナラティブ・ベイスト・サポート －Webを通じた語りを中心に－

富山大学保健管理センター 斎藤 清二

Narrative-based Support on a University Student with Communication Difficulty

－A Single-case Qualitative Research－

Seiji Saito

Center for Health Care and Human Sciences,

University of Toyama

キーワード：発達障害、ナラティブ・アプローチ、Webによる学生支援

Key Words: Developmental disabilities, Web-based student support, Narrative approach

1. 研究の背景

近年、社会的なコミュニケーションに困難をもつ大学生が増加していることが問題になっている。その中核となるのは、知的機能に問題がないにも関わらず、発達障害傾向をもつ学生であると考えられるが、疫学的状況はいまだ明らかではない。富山大学は、2007年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（以下、学生支援GP）」の採択を受け、「『オフ』と『オン』の調和による学生支援－高機能発達障害傾向を持つ学生への支援システムを中核として－」と題するプロジェクトを開始した。このプロジェクトでは、社会的コミュニケーションに困難を抱える学生への支援を中核に据えながらも、ユニバーサル・デザインの考え方を援用し、全ての学生への包括的なコミュニケーション支援システムを構築することを目標とするものである（斎藤2008, 斎藤他2009）。著者らは、この目的を達成するためのミッションとして、トータル・コミュニケーション・サポート（Total Communication Support: TCS）というコンセプトを採用している。TCSは、1）コミュニケーションについて生

じるすべての問題を支援の対象とする、2）支援のためのマルチアクセスの方法を確保する、3）支援者への支援（メタ支援）を重要視する、4）高大連携、社会参入等を視野に入れた縫い目のない支援（シームレス支援）を目指す、という4つの特性を持っている（吉永&斎藤2010a）。

一般に発達障害のある人は、ことばを文字通りに解釈し、普通の人なら暗黙のうちに了解される社会的なコンテキストがよみとれないため、日常生活に著しい困難を生ずると考えられている。しかし一方で、彼らは、テキストをうまく使いこなし、テキストからコンテキストを生み出す能力に優れている。すなわち、彼らは特定の能力を障害されているのではなく、むしろ能力に偏りがあるために、通常の社会的コンテキストへの適応が難しいのだという仮説が成り立つ。著者らは、このような観点から、大学において社会的コミュニケーションに困難をきたしている学生の一群を、暫定的に高機能発達不均等とカテゴリー化することを提唱している（斎藤2010）。このような観点から、TCSプロジェクトにおいては、直接面談によるface-to-faceのコミュニケーションの機会を提供

するだけでなく、「富山大学Psycho-Social Networking Service (以下PSNS)」と名付けられたWebシステムを利用したtext-baseのコミュニケーションの場を大学構成員に提供し、「書く／読む」という相互交流のチャンネルを通じてのコミュニケーション支援を試みている。

PSNSの企画とシステム構築は2007年にスタートし、まずWeb支援システムを学生支援に役立っている先進的な国内外の施設を見学し、ノウハウの提供を受けるとともに、暫定版のシステムを構築して限られたメンバーによる試験運用を行った。2008年4月からは、各学部教授会においてPSNSの趣旨の説明を行い、許可の得られた学部から順に、教職員および学生をPSNSへ招待する作業を開始した。

システムのハード面の詳細は別論文(吉永&斎藤2010b)に譲るが、基本的には株式会社手嶋屋が開発したオープンソースであるOpen PNE ver.2.10.7をベースに開発され、学内のみならず、インターネットに接続できる環境であれば、PCおよび携帯電話からのアクセスが可能である。PSNSへのログインは、IDとして大学から発行されている電子メールアドレス、および任意のパスワードを入力することによって行われる。PSNSを通じた通信は、SSL (Secure Socket Layer) プロトコルを用いて行われ、通信中のデータの盗聴やなりすましが防止されている。PSNSを利用することで、学生は「日記(ブログ)」やSNS内ユーザーの参加と閲覧範囲を限定して教職員が運営できる電子掲示板機能の「コミュニティ」、特定のユーザーに対する私信送受信機能の「メッセージ」への投稿等を通じて、時間や場所を問わず、関係する教職員や学生とコミュニケーションすることができる。また、「マイフレンド」リンク機能を利用して、日記公開範囲(マイフレンドまで公開と全体公開を選択可能)に応じて相談内容を変化させることができる。加えて、自分のページへの他ユーザーの訪問履歴を確認できる「あしあと」や「コメント」機能により、自身の書き込みに対する他ユーザーの関心を簡便に推定することがで

きる。PSNSシステムの運営方針については、当初暫定的な方針からスタートし、教授会や各種の委員会等において、疑問点や意見を幅広く聴取し、方針の変更と改善を漸進的に行っている(吉永&斎藤2010b)。

TCSは2007-2010の4年間に、述べ60人の発達障害のある、あるいは発達障害傾向があると判断された学生の支援を行ったが、一部の学生はオンライン支援であるPSNSも並行して利用した。PSNSには、富山大学の構成員(学生、教職員)であれば誰でも参加できるので、支援を受けている学生のみが利用しているわけではなく、2010年度末の時点では、全構成員の約50%が登録し、活発に利用している構成員は約20%である。

本プロジェクトの理論的基盤の一つとして、著者らは、ナラティブ・アプローチを採用している(Greenhalgh et al 1998/2001, 斎藤&岸本 2003, Charon2006/2011, 斎藤2010)。ナラティブ・アプローチの考え方によれば、人間は日々の経験や自己について、他者との関係性において、語り語りあうことによって、自己を創造していくと考えられる(Charon2006/2011)。このような考え方は、成人における経験的学習とも深い関連を持っている。経験的学習理論は、省察を促し、理解を確立したり改変したりするための手段として、社会的な対話を最も重要なものとみなす(Greenhalgh2006/2008)。PSNSは、ユーザーの個別性に強く依存しながらも、ユーザー同士、ユーザーと支援者の物語的交流を促進し、同時にユーザー自身の自己内対話を活性化する場を一貫して提供する。本研究では、TCSの支援を受けた発達障害傾向のある一女子大学生が、入学から卒業までの間にどのような体験を経て自己成長していったかを、主としてPSNSを通じて表現され、共有されたテキストを質的に分析することによって描写する。

2. 研究の対象、目的、方法

1) 対象事例

本研究の研究協力者は、本プロジェクトがスタ

ートした年に入学し、プロジェクトが終了した年に卒業した女子大学生A子さんである。

Aさんは文系のB学部所属で、入学直後に保健管理センターに自主来談した。来室時の主訴は「うつ気分」であり、来室の目的は「病院紹介希望」であった。初回面接は筆者（斎藤）が担当し、病院を紹介することに併せて、センターに定期面接に通ってもらうことが了承された。この時点では、TCSプロジェクトはまだ構築されておらず、Aさんは3年生までは、保健管理センターでの定期的なカウンセリング的サポートを受けつつ、キャンパスライフを送ることになった。

3年生になり、本人が就職活動を意識しはじめ、カウンセリングに並行して、修学支援、就職支援、心理教育的支援（自己理解の促進）の必要性が生じて来た。複数の支援者および本人を含めた話し合いの中から、カウンセリングに加えて修学支援を行うことが合意された。直接面談（オフラインサポート）は、トータルコミュニケーション支援室（TCSI）において定期面談を行うことになり、卒業まで継続された。AさんはPSNSにも登録し、マイフレンドである支援者を読者対象とする日記を自発的に投稿するようになった。

4年間を通じて、保健管理センターでのカウンセリングは計58回行われた。3年生から卒業までは、カウンセリングと平行してTCSIにおける面談を通じた修学・就職支援が行われた。この間に、PSNS上に50編の日記が投稿され、その日記を媒介として支援者とのコメントを通じたやりとりが行われた。

修学支援を開始するにあたって、本人の了解のもと、支援者間の情報共有のためのナラティブ・アセスメントが作成され、PSNSのコミュニティを通じて、支援者間で共有された。なお、ナラティブ・アセスメントとは、西村（2010）によって提唱された、発達障害大学生のためのアセスメント法であり、「支援における連続的な判断プロセスを物語的対話を通じて行うための方法論」と定義されるものであり、アセスメントの内容を物語的に記述することによって、支援者間の情報交換

や支援方針の検討、振り返りなど、チームアプローチを有効に行うためのツールとして用いられるものである。

Aさんのナラティブ・アセスメント

- ・ AさんはB学部3年生でCコースに所属しています。D県出身です。
- ・ 中学生の頃まで、継続的にいじめにあっていたとのことで、辛い毎日を送っていたようですが、合唱部に所属し、そこでは部長を務めるなど、実力を発揮していたようです。
- ・ 高校3年生の5月頃に、気分的に不安定になり、養護の先生が心配してくれて、Y病院を紹介されました。ここでは「うつ」と言われ、デプロメールを最大で4錠服用していましたが、その後3錠に減量。一時、学校へ行けなくなったが、後半からは学校へも行けるようになり、だいぶ良くなった状態で大学へ入学しました。
- ・ Y病院の小児科の主治医からは、後程「彼女は実はアスペルガー。でも本人には告知しておらず、うつということで治療していた。家族もあまり分かっていないのではないか」ということを知らされました。
- ・ 4月から入寮し、多少他人と会うのが怖いという感じはあるが、まあまあ過ごしている状態で、市内の病院を紹介してほしいということで来室し、斎藤が面接しました。
- ・ Aさんは、一見無表情で、無愛想に見えますが、ゆっくりしたペースで話を聞くと、必要なことはきちんと答えてくれます。趣味は本を読むこと。音楽を聞くことなど。星新一のショートショートやオーヘンリーなど。京極夏彦のミステリーを読んで、妖怪とかに興味を持ち、日本の民俗学や人類学を勉強したくて、人文学部を選んだということでした。
- ・ いじめなどによるトラウマのためか、集団に入っていくことに怖さを感じたり、教員などの否定的な言動を、まともに受け取ってしまい、落ち込むということを繰り返していましたが、そのたびに、面接でそのエピソードを共有し、最

- 低限のアドバイスを与えると、それなりに気分が回復して、また日常生活に戻るということをくりかえし、前期を乗り切りました。
- ・夏休みから後期に書いて、サークルでの人間関係ができ、居場所がある感じになり、しだいに気分的にもおちついてきました。
 - ・2年生になって、無理せず授業をこなしていくコツがつかめてきて、学業的にはあまり問題はなくなりましたが、サークルで責任のある学年になったため、そちらでの葛藤のため、落ち込むことがあり、一時休部したりもしましたが、先輩などの援助もあり、なんとか乗りきって、3年生に進級しました。
 - ・3年になり、大学生活にも慣れ、表情も明るくなり、態度にも落ち着きが出てきたように見え、センターでのカウンセリングの回数も少なくなりましたが、そろそろ就職活動をと考えると、気分が重くなることがありました。
 - ・しかし、前期には就職説明会にも出席、夏休みにインターンシップをこなしました。ただ、本人の感じている危機感は漠然としており、むしろ周囲から見て彼女の就職活動に不安を感じるようになってきました。PSNSにも登録（たまにマイフレンド限定日記を書きます）しましたが、前期は、就職支援を個別に受けることについてはあまり希望していませんでした。
 - ・10月に入り、自主来談し、気分の落ち込みを訴え、何が一番プレッシャーか？と訊ねると、やはり就職活動であるとのことでした。そこで、TCSIでの個別支援を受けることを勧めたところ、承諾し、面接の予約を入れることになりました。
 - ・A子さんは、対人関係についての苦手感は漠然ともっていますが、具体的にどのようなスキルや方策が不足しているかについては、自覚がほとんどないように見えます。上手いかなくなると、気分の落ち込みや体調の変化（頭痛など）の形で出ることが多いようです。
 - ・表面的な表情の乏しさとは裏腹に、音楽を楽しむ感性や、演劇やお笑い（ラーメンズの哲学的

コントに感動しています）を心から楽しむことができること、文学への集中（妖怪が好きです）など、内面的に豊かな要素はたくさんあります。

- ・就職の希望についてですが、前期の段階では地元D県かE県を希望していたのですが、太平洋側の関東とか東海に就職したいという希望を語ることもあるようです。両親は地元への就職を望んでいるだろうが、自分の希望を優先したいという気持ちも持っているようです。
- ・カウンセリングは2週間に一度くらいのペースで続きますので、広い意味での修学・キャリア支援をよろしくお願い致します。それと、好きなことの表現の場を確保してあげることがA子さんの積極性を増すのではないかと期待しています。
- ・現在、附属病院の神経精神科につながっていますが、抗うつ薬はほとんど飲まなくともひどく落ち込むことはないようです。

2) 研究の目的

本研究の目的は、以下の2点に要約される。

- ①社会的コミュニケーションに困難をもつ大学生が、Webと対面による支援を受けつつ、4年間の大学生活を送る中で、どのように成長、変容していったかの過程を、語りのテキストを分析することを通じて描写する。
- ②高機能発達不均等のある大学生に対する、オンとオフを併用した支援法の改善に役立ち、新たな実践に枠組みを提供する暫定的なモデルを提案する。

3) 研究の方法

本研究は、単一事例質的研究法（斎藤2008b）を援用して行われた。質的研究法とは、①すでにある仮説を検証するための研究ではなく、あらたな仮説やモデルの生成を目指す、仮説生成的研究であり、②環境を統制した実験的研究ではなく、現場において自然に起こっていることを記述・分析する自然主義的研究であり、③データとして数

値ではなく主としてテキストを用いる研究であり、④論理実証主義の認識論ではなく、現実は言語を用いた社会的相互交流によって構成されるという、構成論的な認識論を基盤とする研究法である（斎藤 2005）。

データの収集を単一事例に限定することの問題点と妥当性については、斎藤（2008b）がすでに論じたように、研究目的と相関的に判断されるべきである。本研究の目的は富山大学における発達障害大学生支援システムという限定的で個別性を有するフィールドにおいて、A子さんという個別の人間が経験したこと、その意味づけを描写し、その中から新たな実践に应用可能ななんらかの知識資産を生成することを目的とする。このような研究は、効果研究ではなく、質的改善研究として位置づけられるものである（斎藤2008b）。

今回の分析に用いたデータは、①保健管理センターにおけるA子さんのカウンセリング記録（約24,000字）、②PSNS上に公開されたA子さんの日記（コメントを含めて約40,000字）、③PSNS上での支援コミュニティのログ（約80,000字）を用いた。

データの分析法としては、PSNS上に公開されたテキストを中心に、Greenhalgh（2006/2008）および、Charon（2006/2011）による物語分析法に準じた分析を行い。全体の経過を描写するための概念生成法として木下（1999, 2003）の提唱した修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ法を応用して用いた。

3. 結果と考察

「ためらいがちのクレーム」「有効化（validation）」「好きなもの語り」「往復書簡」「気付き（awareness）」「共有（sharing）」「誘発された自己開示」「自己アイデンティティの語り」の8個のカテゴリーが生成された。

以下に結果と考察の提示を木下（1993）が提示した概念説明的記述に準じて行う。

作成されたカテゴリーと概念は太字にて示す。A子さんの日記中に表現された例示（ヴァリエー

ション）を [N1] ～ [N〇] で示す。支援者からの応答は [R1] ～ [R〇] で示す。#の番号は報告された日記の番号を現す。

A) カテゴリー1：ためらいがちのクレーム

Aさんにとって、日記を書き、自分の表現したい内容を読者に曝すという行為はとても勇気のいることであった。一つの日記が書かれてから、次の日記が書かれるまでには長時間を要する傾向があった。Aさんの日記において比較的早期に現れたのは、オフラインでの支援室でのやりとりにおいて十分に表現できなかったことを、PSNS日記に書くということであった。その中には、もしその内容が直接面談の中で語られたとすれば、支援者に対する不平や不満として受け取られてしまいかねない内容が含まれていた。Aさんは、そのような「クレームとして受け取られかねない感情」を「ためらいがちに」日記において表現した。

[N1] 〈コミュニケーション支援室〉

コミュニケーション支援室の面談を受けてきました。前回の面談で、私の好きなマンガについて知りたいので、現物を持ってきてほしいとのことでした。高橋葉介という人の作品で、筆で描かれた絵がとても美しく、水木しげるや高島華宵の影響が見られるのをもっていきました。グロテスクな描写が先生たちには受け付けなかったようで（昔から人体をバラバラにすることが多い人です）、気持ち悪いとか怖いとかいう感想でした。

うーん、作者を尊敬して作品を集めちゃっている私にとってはほとんど拷問だ。

その後、高橋葉介のどこが好きか聞かれましたがあまり答えられませんでした。まあ語ると長いし語る気もなかったのでそのことについては落ち込んでいないのですが。

理解できなかったのが、「この漫画家のどういところが好きか具体的に答えられると、自己PRになる」という話でした。実は最初の面接からこういう趣旨のことを言われていますが、

ずっと疑問に思いつつ聞けないでいます。好きなマンガや画家について「好きな理由」を考えることは自己分析の一環だと思っていたら、「自己PR」と言われ驚いています。

それにしても先生たちは私の話をメモを取りながら聞いているのですが非常に苦手です。個人情報云々が気になるということではありません。うまく表現できませんが、たぶんそれが生理的に不快なのだと思います。などと考えつつやめてほしいとも言えず…。

私が学生支援課に体調不良なことが多く単位取得に不安を抱いているということを相談しに行ったところ、コミュニケーション支援室の方に話が行ったそうで、18日はそれについての話も少ししました。でも、先生たちが相談内容についてどれくらい把握してくださっているのか要領を得ませんでした。たぶん私の聴き方も悪かったのでしょうか。

1年生の時、学部で相談に行った際のように「成績証明書には不可になった科目は記載されない」「そういう悩みを抱えた学生はいっぱいいる」となだめられて終わったらどうしよう。コミュニケーション能力の欠如というか、人と関わるのがこの上なく不安なのですが、就職できるのでしょうか。支援室の先生たちはそれについては言及したことはありませんが。

日照時間が少ない影響なのか、昼間起きてるのが辛くて仕方がありません。授業と就職活動を両立できる気がしません。（#3）

[ためらいがちのクレーム] は次項で示すように、「有効化」を含む応答によって、「好きなもの語り」へと展開していったが、修学支援のプロセスが次の段階に入る時に、再び出現することがあった。次の日記は、修学支援から就職支援へと面談の目的が変更された直後に書かれたものである。

[N2] 〈支援室〉

きのう久しぶりに人前で泣いてしまいました。

泣いたというより、涙が目にとんとたまっていき、こぼれたというのが正しいです。ハンカチを持ってくればよかったと思いました。

就職の相談をしている時でした。相手と目を合わせられず、これからの就職活動の苦勞を考えると、劣等感と不安でいっぱいになりました。就職活動をするのは「がんばったけどだめだった」ということにしたいという面があります。

「実家に帰ってくればいいのだから、気楽にうけてくればいい」と家族は言います。

人と会うのすらこんなに苦しいのに、就職なんてできるのでしょうか。（#40）

B) カテゴリー2：有効化 (validation)

「ためらいがちのクレーム」を含む日記に対して、支援者間での情報交流が行われ、対応方針が話し合われた。支援者側の共通認識として、Aさんが面談中に表現できなかった感情をPSNS上で表現してもらうことに対して高い価値を認め、それを肯定的に評価するとともに、積極的に対話を促進する方向で対応することを確認した。PSNS上では支援者から「有効化」を意識したコメントが返されていた。

[R1] 〈N1へのレス〉

> 作者を尊敬して作品を集めちゃっている私にとってはほとんど拷問

よくわかります。自分の好きな作品というのは、自分の分身というかそれ以上のものですから、他の人から理解されないというのは辛いですよね。まあ、それだけユニークで独自性があるという証明でもあるのですが…

> やめてほしいとも言えず…

↑ 上記については、私から伝えることもできませんが、どうでしょうか？

> 授業と就職活動を両立できる気がしません。

これはとても大切な問題だと思えますし、そう感じるの的を得ていると思えます。確かに授業と就職活動と卒論をすべて同時並行で進めるというのは、誰にとってもとても困難なことです。どういう優先順位をつけるか、それに伴って、具体的に誰に配慮を求めるか、支援室の先生方も含めて、一緒に考えていければと思います。

[R2] 〈N2へのレス〉

そうでしたか。A子さんが泣いているように見えませんでした。鈍感で申し訳ないです。私なりに、就職活動に向き合っていこうというA子さんのお気持ちを感じ取ったつもりでいます。

昨日は就職活動の標準的な流れを説明しましたが、その中で、A子さんに合った方法を一緒に探していきたいと思っています。

面談の場では言えなかったことを、PSNSに書いてもらえるととても助かります。よろしくおねがいします。

C) カテゴリー3：好きなもの語り

表現することへのためらいが、「有効化」の応答で受けとめられると、A子さんは、自分が好きなもの、心から愛する物事について、豊かな語りを表現するようになった。その語りは、豊富な知識の披露に始まり、豊かな感情表現を含むものであった。さらにその語りは、時間順の流れを持っており、自分自身の歴史を明らかにする形式を持っていた。

[N3] 〈高橋葉介〉

ちょっとだけ語ってみます。

出会いは週刊少年チャンピオンに連載していた短編シリーズの「学校怪談」です。この雑誌は父が、手塚治虫が連載を持っていたころから定期購読していた影響で毎週読んでいました。

第1話から明らかに他の連載陣とは違う絵でしたが、あまり抵抗はありませんでした。人が

すぐ死んだりそのたびに内臓が出たり、主人公が死んで次の週には何事もなかったかのように登場するのがショッキングでした。文庫版を全巻持っていますが、主人公が最後に精神病院らしきところに入れられて終わるなど、今ではできないような話もあります。

文庫版が出たときに懐かしくて買いましたが、この漫画は怖くて救いのない話ばかりではありませんでした。台詞の一切ないサイレントはこのシリーズで初めて読みましたし、意外な結末あるなど今読み返しても面白い話が多いのです。だからこそグロテスクな表現が多くても読んでいたのだと思います。

今読んでも怖いと思う表現は、1つのコマの中で幽霊や妖怪がそばにいるのに登場人物たちがまったく気づいてないものです。古い家に泊まったら座敷わらしがついてきてしまい、「私と入れ替わろうとしている」と、ひどく怯える少女となだめようとする主人公がいて、天井から座敷わらしが不気味な笑みを滲ませて少女を見つめているコマはその最たるものだと思います。

不安は的中し、座敷わらしは主人公の目の前で少女と入れ替わってしまいます。しかし主人公を含め誰もそのことに気づきません。最後のコマでは主人公は本物の少女を夢に見て、「誰だか思い出せない」と独白して終わります。

数年たってから著者が筆で絵を描いているらしいということがわかりました。きっかけは某雑誌で偶然見つけた短編でした。人物の線が美しいので、目を凝らすと明らかにペンでは出ない線だったのです。その後、著者の作品を読むたびに人物の輪郭の描き方を意識して見るようになったので、著者との第2の出会いと言えるかもしれません。「学校怪談」以降の作品を見ていると絵の変化が激しいことがわかります。最近描き方が変わったみたいで、人物の眉と目だけ印象が違います。

近年の絵の魅力が発揮されているのが早川書房から出ている「夢幻紳士」3部作だと思います。これは著者の人気キャラクター・夢幻魔実

也の活躍を描いた物語です。マンガですから当然白黒なのですが、画材のせいか塗り方のためかその黒がやたら美しく感じられます。シリーズ第2部である人物が家に放火するのですが、その人が松明を手に燃える家を見つめる目がすごいインパクトでした。狂気を帯びているのが一目でわかりました。

「ジョジョの奇妙な冒険」の荒木飛呂彦のように（この人の絵もすごいです）画集が出たらぜひほしいです。

絵に抵抗がなくて、グロテスクな描写が苦手ではなかったら是非お勧めです。（#4）

[N4] 〈今年で没後18年〉

尾崎豊が好きです。この人が亡くなったとき、当時3、4歳だった私は存在すら認識していませんでした。

本格的に聞き始めたのは高校2年生の時でした。この年、13回忌記念のアルバムが発売されました。「I LOVE YOU」が好きで、ちゃんと聞いてみたいと思っていたので買いました。初めて聞く曲が多かったのですが、歌詞に胸を打たれました。まず1曲目、「17歳の地図」という曲の「親の背中にひたむきさを感じて」「手を差し伸べてお前を求めないさこの街」というフレーズで、彼は「卒業」「15の夜」のような十代の葛藤や反逆を歌っただけではないのだと感じました。

「卒業」にしても「15の夜」にしても改めて歌詞を読むときちんと言葉を選んで書いていることが分かります。「これからは何が俺を縛り付けるだろう」「あと何度自分自身卒業すれば本当の自分にたどり着けるだろう」や「誰にも縛られたくないと自由になれた気がした」というフレーズによって、この人は単に逆らったり逃げたりするだけでは何も変わらないということを知ってこういうことを書いているのだと感じました。まあ、これが嫌だあれが駄目だと書いている独り言みたいな歌なら最初はインパクトで売れるかもしれませんが死後も聞き継

がれたりするはずが無いんですよね。

よく聞いていたのは半年間ぐらいで、しばらく尾崎から離れていましたが、この前何年振りかに尾崎の歌を某動画投稿サイトで聞いたら自然と涙がポロポロ出てしまいました。自分でも驚きました。ちなみに昔も聞いては泣いていたのですが、歌う姿を見るのはそれが初めてだったことや、好みが高校生の頃と変わっていない可能性を差し引いても、5年近く離れていた人間を泣かせることは相当すごいことなのではないでしょうか。

それがきっかけで、つい最近コンサートのDVDを買いました。「Birth」という最後となったコンサートツアーです。MCの時の両頬に人差し指を当てたおどけたしぐさに驚きました。意外にお茶目な人だったようです。「KISS」という曲の直前に「君たちもいずれ社会に出るだろうけど、寂しいときには俺が行って優しくキスしてあげる！」と、観客に向かって投げキスしたのは私までドキッとしてしまいました。私は投げキスする人間を外国のフィギュアスケーターしか知りません。（注：「KISS」はラブソングではなく社会人を励ます歌です）

「I LOVE YOU！」と観客に叫んでいたのも印象的でした。

曲はほとんど20代になってから作ったもので、ほぼ10代の頃の曲しか知らない私には雰囲気の違いが感じられました。新しいものの模索中での死は本当に惜しいと思いました。

アンコールの後、穏やかな表情で「どうもありがとうございます。また会いましょう」と言って去っていったのを見て、何も確証は無いのに、この人は自殺で亡くなったのではないと思いました。もちろん後で気持ちの変化があった可能性は否定できないし、この時点で自殺を考えていたとしてもまともな人間ならそんなことをファンに言うわけがないのですが、それでも未来のことを約束されると希望を持ちたくなります。

某動画投稿サイトで尾崎の動画に「古い、新しいは関係ない。残るのは本物だけ」というコメ

ントがありました。その通りだと思います。賛否両論はあつて当然ですが、死後も私のようなファンがいるのはやはり彼の歌が魅力的だと感じる人がいるからでしょう。(＃5)

上記に例示されたような「好きなもの」「好ましいもの」についての豊かな語りは、卒業までの支援の間を通じて継続的に日記の話題に取り上げられた。話題の対象も次々と付け加えられ、歌手、漫画家、小説家といった人々から、絵画などの芸術作品、さらには思想といった抽象的なものへと展開していった。さらにそれは卒業研究のテーマにまでつながることになった。

[N5] 〈抒情画〉

卒論では『少女の友』という少女雑誌とその専属画家・中原淳一について扱う予定。

『少女の友』は明治41年から昭和30年まで、実に47年という日本の出版史上最も長く刊行された雑誌で、川端康成も連載していました。田辺聖子も少女時代に愛読しており、投稿欄に作品を送っています。

中原淳一は表紙や連載を手掛け読者である少女たちから圧倒的な支持を得ました。そのファッショセンスは現代人の目から見ても色あせない輝きを放っています。私は彼の描くセーラー服の襟から愛を感じます。繊細で美しい曲線で、いかにも少女の胸元を飾るのにふさわしい感じ。初めて見たとき、自分がセーラー服を描くとただの線の組み合わせになることを恥じました。

でも1番好きなのは高島華宵。この人が生きていたら「華宵先生」と呼びたいです。彼の描く女性は色っぽくかつ上品。個人的に彼の描く服を着たいです。「サロメ」がプリントされた絵葉書を持っていますが裸足のつま先の描き方が浮世絵のようだと思っていたら、日本画の影響も少なからず受けていたことがわかりました。それを知って少し得意な気持ちになってしまいました。

そういえば先月、石川県金沢で開かれた夢二展に行ってきました。夢二のゆかりの地だそうで。

夢二はグラフィックデザイナーの先駆けで、挿絵だけでなく本や楽譜の装丁も手掛け、東京に自分でプロデュースした雑貨を売る店までもっていました。…ということを行ってみて初めて知りました。作品はいくつか知っていたのですが。

館内には「宵待ち草」が流れていました。1階は常設展示をしており、夢二の生涯や創作に影響を与えた女性のことを扱っていました。苦悩の付きまとう一生だったらしく、彼が女性にあてた手紙や母への思いをつづった短冊を読んで思わず目頭が熱くなってしまいました。

2階は今回目玉の特設展示で、植物や動物をモチーフにした作品が展示してありました。子供向け雑誌の仕事も扱われていたのですが「夢二は子供向け雑誌の仕事は楽しんでやっていた」という説明に少し救われる思いがしました。作品に使われる色も黄色や赤といった明るい色で、牧歌的雰囲気醸し出している気がしました。

ひとつ衝撃だったのが「ほたる」と題された絵です。和装の女性の絵なのですが、その表情、とくに目から彼女の悔しさや歯がゆさといった気持ちが伝わってくるようでした。短歌らしいものも一緒に書いてあり、どうやら彼女が客が冷淡に扱われた芸妓（遊女？）らしいとわかりました。短歌を描いたのが夢二なのか他の誰かなのかわかりませんが、ちょっと腹が立ってしまいました。

売店には夢二のデザインをあしらったメモ帳などが売っていました。イチゴとどくだみとキノコが可愛いです。

夢二が多彩な才能を発揮していたクリエイターだということがわかる小旅行でした。

ああ、思いつくまに書いてしまった。上の3人の経歴、作品等に間違いがあったらお知らせください。(＃11)

D) カテゴリー4：往復書簡

自分が好むものについての語りが連続して日記に投稿され、それに対して支援者からの肯定的関心を示す応答がなされる中で、A子さんの日記表現は、初期の一方向的に読者に向かって投げかけら

れる語りから、しだいに双方向的なやりとりへと変化していった。

[N6]〈前回の日記にコメントを下さった方へ〉

Sさんへ

>私は実は尾崎豊については、名前を知っているだけで、今まできちんと聴いたことがなかったのですが、A子さんの日記を読んで、「これは一度きちんと聴いておかなければ」と思いました。

コメントありがとうございます。

私の日記を読んで歌を聴いてみたいという気持ちになられたなんて、ファンとしてうれしいやらあの日記にそこまでの影響力があるのかと驚くやら、複雑な気持ちです。

尾崎豊には今でも色褪せない魅力があると思います。それを共有できる人が増えるのはとてもうれしいです。

たとえば尾崎を聞くことを「渋い」と言われたことがあります。確かに時代を感じさせる表現はあります。「ダンスホール」という曲に「あたい」という一人称や「長いスカート」という単語があり、驚きました。ジェネレーションギャップですね。

この彼女「あたい」は歌の主人公に学校をやめて働いていることを話します。尾崎はそういった状況に対する彼女の感情をこう表現しました。

「長いスカート引きずってたのんびり気分じゃない」

この秀逸さは語るまでもない気がするから割愛します。もちろん「ダンスホール」は大好きな曲です。

>A子さんの文章は説得力があります。自分の感動を第三者にも共有させる橋渡しの力のある文章ですね。

そんな事を言われるのは初めてで、戸惑って

しまいます。作文でほめられたことはないですし、受験での小論文は大嫌いでした。

たぶん好きな物事については、頑張って順序立てて書こうと思えるのだと思います。小論文は社会問題など言ってしまうと全く身近じゃない、考えたこともないようなテーマが多かったように思います。作文は起こった出来事をただ書けばいいのだから楽だ、と思って書いていたような…。

好きな物事については、やはりそれを誤解されるのは心外で、じゃあこの日記を「公開しない」に設定すればすむのですが、「私の好きなものはこれだけ素晴らしいのだ！」ということを知ってほしい気持ちもあり、それでもあまり大勢の人や見ず知らずの人に公開するほどの勇気もないのです。

書くときはすごく悩みます。

書きたいことにまつわる具体的なエピソードがあってもうまく前の文とつなげないときは書きませんし、ファンだからといって感情的な文は自己満足のような気がするので最低限にしようとしています。「私はこれが大好きですが公平な目も持っているですよ」という精一杯のアピールかもしれません。また、同じ表現や単語はくどいのでなるべく使わないようにしています。これは単に私の文章の好みです。「～がすごい」などのあいまいな表現も避けます。星新一がエッセイで「すごく」という言葉を安易に使う風潮はどうかと思うということを書いていたので、それをちょっと参考にしています。人の文章を読んでいてこの言葉があると「すごいってどういうふうに？」と突っ込みたくなります。でも、どう言えばいいかわからないときはとりあえず「すごい」と書いておいて、自分の文章にイライラしてから、「こういうところがこうなっていてこう感じたな」と具体的に考えていくのでやっぱり便利な言葉です。まとまらないと思った時はなくてもいいと思った所を削ったり順番を入れ替えたりします。高橋葉介についての文はこれですっきりしました。

などと偉そうなことを言いつつまだ2回しか興味のあることについての文を書いているんですね。興味のあることや好きなことについてなら、みんなこれくらいの文は書けるような気がします。

いつも、横書きでこの長さでフォントの大きさでは読む方が嫌になるかと思っていますがどうなのでしょう？ (#6)

[R3] 〈N6へのレス〉

おはようございます。

前回のレスについて、日記にとりあげていただきありがとうございます。

>たぶん好きな物事については、頑張って順序立てて書こうと思えるのだと思います。

これは、とても大切なことではないかと思えます。誰にとっても、自分が好きだと思うことについては、自分の中だけにとどめておくのではなく、他者に伝えようとするし、伝えるためには、ていねいに言葉を選び、ていねいに言葉をつなぐ必要がありますが、その作業は苦にならないですね。

同時に、自分にとって大切なものについて他者に語るということは、ある意味では、自分自身を他者の評価にゆだねるという側面をもっているため、ためられるということも当然だと思います。

しかし、「自分にとって本当に関心のあるもの」についての、ていねいな文章は、おそらく多くの人に対して「伝わる」ものだと思いますし、勇気をもって公開してよいものだと思います。

>横書きでこの長さでフォントの大きさでは読む方が嫌になるかと思っていますがどうなのでしょう？

これについては、一般的に言って、このくら

いの長さなら問題ないと思います。もちろん、多数の人に公開する場合には、興味をもたない人も当然いますので、そういう人は長さにかかわらず興味をもたないので、どちらにせよ気にする必要はなく、興味を持つ人にとっては、このくらいの長さは苦になりませんし、むしろ必要なボリュームなのではないでしょうか。

E) カテゴリー5：気付き (awareness)

好きなものについて語り、その話題への応答と相互交流が繰り返される中から、A子さんは、自分に起こっているプロセスについての気付きを語るようになった。その多くは、今までに自分にも説明のつかなかった体調や気分の不調や自信のなさなどについてのものだった。

[N7] 〈気づいたこと〉

体調が崩れるとももちろん苦しいのだけれど、なんとなくホッとしてしまうのは、授業に出ないことや就活をしていないことが後ろめたいからだと感じました。

思えば前は、自分はただ怠けているだけじゃないのかと考えてしまって、辛かったです。多分これも気分が落ち込んだとき、悪循環みたいにして浮かぶ考えなのだと今は思いますけど。気分の落ち込みと体調不良をイコールで結ばなくて苦しかったですね。

今は攻撃の対象が外へ向くようになって授業中は「早く終われ終われ」と念じています。うーん、不健全だ。

1・2年の頃は体調が悪くても部活に参加していましたが、それは後ろめたさを減らすためだったんですね。

自分でも何を書いているのかわからなくなったので終わりにします。 (#7)

[N8] 〈気づいたこと・その2〉

「自分の知っているようなことを人が知らないといらいらすのでしょうか？」と院生の先輩から言われました。23日にコースのメンバーと

飲んだ帰りのことです。酔っていましたが眠かったので話の流れなど細かいところは覚えていませんが、「自分を卑下するのはやめたほうがいい」ともいわれました。

その先輩に話したことではっきり覚えているのは1年くらい前に飲み会の席で「自分は太宰治が好きだがどうしてもファンの視点で見えちゃうので研究の対象にはできない」ということくらいです。つまり飲み会くらいでしか親しく話さない仲です。しかし、凶星でした。

どうやら私は自己評価が著しく低いようです。たとえば先輩の言うように、自分の知っているようなことを人が知らないとなるとまずイライラし、イライラした自分に自己嫌悪を覚えます。優越感を覚えた場合も同様。また相手が自分より能力が優れている場合、特に何かフォローしてもらった時なども「この人に引き換え自分は」とやはり自己嫌悪になるのです。ちょっとずつ傷つきながら、いや、傷つけながら生活してきたような気がします。どうりで人付き合いが辛いわけです。

…というようなことが分かってかなりすっきりしました。しかしここからどうすれば良いのやら。「あなたはもっとファンキーな人生が送れるはず」というのは同じ先輩の言葉ですが、何を根拠にと聞いたら「勘」だそうです。(# 13)

F) カテゴリー6：共有(sharing)

A子さんが日記で語る、「自分の中、あるいは自分と環境の中で起こっているプロセスへの気づきの表現に対して、支援者はその表現を分かち合う(シェアする)ことを心がけていた。このようなやり取りの後で、A子さんの体調や気分は著しく改善していることが併せて語られるようになった。

[R4] 〈N7へのレス〉

こんばんは。

>体調が崩れるとももちろん苦しいのだけれど、なんとなくホツとしてしまうのは、授業に出ないことや就活をしていないことが後ろめたいからだと感じました。

これは重要な気づきですね。なるほど…。

>気分の落ち込みと体調不良をイコールで結ばなくて苦しかった

気分が落ち込む→必要なことをしていないという罪悪感が生じる→ますます気分が落ち込む→限界までくると体調が崩れる→少なくとも罪悪感は少し軽くなる

この流れから考えると、体調が崩れるというのは、悪循環を緩和するための、身体の知恵かもしれないですね。

体調が悪くても無理して部活に行くと、罪悪感は減るけれど、益々苦しくなる→これももしかすると悪循環の一部を形成していたかもしれません。

>今は攻撃の対象が外へ向くようになって授業中は「早く終われ終われ」と念じています。うーん、不健全だ。

いやいやこれは、不健全ではなく、有効な対処かもしれませんよ。

いずれにせよ、体調と気分の悪循環を緩和する大きなヒントになるのではないのでしょうか

[R5] 〈N8へのレス〉

>あなたはもっとファンキーな人生が送れるはず

これはすばらしい言葉ですね。

自分が何か(特に辛いこと)を感じるメカニズム(というかプロセスというか)、は、通常は自分には見えないものですよね。それが見えて腑におちると、人間は明らかに変化します。

それに気がつくことは、通常難しいことですし、見えたからといって全てが解決するわけで

はないのですが、それでもそれが見えるということは大きな変化（もちろん良い方への）であることは間違いないと思います。

しかし、自分が変化するというメカニズムは、これはこれで見えないものではあるのですが…。

G) カテゴリー7：自伝的なもの語り

PSNSでの相互交流的な語りが交換される中から、「体調、気分ともに良くなった」A子さんは、長大な自伝的語りを日記に記載するようになった。

[N9] 〈回想〉

先日支援室で人間関係についてのお話をしました。

体調が割と良くて冷静でいられるので書いておきます。

私は保育所の頃は他の子と同じように友達がいまいました。互いの家に遊びに行ったり、公園で遊んだりしました。

小学校に上がりました。よその保育所からも子どもが集められ、当然新しい人間関係ができることになります。私は母が「遊んでいる子たちの仲間に入りたくても声が掛けられない子だった」と証言するように、積極的に友達作りをしませんでした。そうこうするうちにある女の子と家を行き来するような仲になりました。彼女は今思うと私の家に父のゲーム機があったから利用していただけのような気がします。私はいわゆるゲーム機など触ったこともないような子だったので、私と遊びたいというよりそちらが目的だったのでしょう。私が本好きであることもずいぶん馬鹿にされましたし。

彼女に関する嫌な思い出が甦ってきたので（嫌な思い出しかないのですが）これ以上は割愛。その後も話すときは話すけれどそれほど親しくはない、という人間関係が続きました。「変な人」というレッテルが付けられていたようで、数人に目の前でクスクス笑われたり、理解不能なからかい方をされたり（理解不能なので5W1Hすら説明できません。強いて言うなら

私が困るのが楽しかった？）しました。主に女子からです。小学生など未熟にもほどがあるので、私の周りの人間の性格が特に歪んでいたなどと思いません。しかし、そういう環境で私は夜1人で泣くこともありましたが、ますます読書に没頭していったのは事実です。想像に過ぎませんが、1人で読書する私は（当たり前ですが）人の目に異質な人間として映ったのかも知れません。でも友達がいないことを辛いとは思いませんでした。

6年生の2学期になっていじめが始まりました。このことは実はすごく意外でした。相変わらず特に仲が良い子はいなくても、そこそこ良好な人間関係がクラスで築けていたと思っていたからです。ところが同じ班と一緒に作業したりした子がいじめのグループに入っていたものですから余計に驚いてしまいました。人は簡単に態度を変えるらしいと幼心に感じました。いじめの主な内容は無視や仲間外れに当たるものです。これは口では言えないほど応えました。同じ小学校だった弟たちに壘が及ばないよう願いました。

このクラスで「30人31脚」というテレビの企画に出たことがあります。人が私と自分の足を結ぶのを嫌がるのを見るのはとても惨めでした。しかし私は妙に冷めたところもあって、いじめのグループの1人の子が私と隣同士になり、先生に順番を変えてくれるよう頼み始めた時はどう言い訳するか興味深く見ていました。結局聞き入れられずそのままの順番で走るはめになりました。

テレビ局の人が取材に来た時、グラウンドに集まっている私たちの写真を屋上から撮ってくれました。みんなで上を向いて拳を突き上げたのを覚えています。団結しているクラスの標本みたいな写真が出来上がりクラスに飾られました。そこに他のみんなと同じような顔で写っている自分がとても滑稽だと今でも思います。

ここまで読んで暗い気分になった人は申し訳ありません。まだ続きます。

<その2> 2010年04月27日23:45

中学校での3年間のことを書くのは簡単です。3つの小学校から生徒が集まり、私へのいじめも広まりました。

この頃思ったことは、私を嫌って避けるような人でも友達への振る舞いはごく優しいものであることが多い、つまり私への態度はその人の1面でしかないのではないかということ。これは本当に私を苦しめました。その人を憎みきれなくなってしまうからです。彼らが本当に人ではないようなタイプで遠慮なく心から軽蔑することができたらどんなに楽だったでしょう。

同じ中学校から行く人が1人もいない高校に進学しました。

ところが困ったことになりました。人と会話できないのです。何を話せば良いやら分からないのです。ほぼ4年間年代と口を利かなかった影響でした。ある子とせっかく仲良くなったと思ったら面と向かって「あなたは変だ」と言われ距離を置かれました。

部活は合唱部に入りました。歌うことが好きでした。クラスの誰とも口をきかなかった時期でもクラス対抗の合唱コンクールなどでは頑張って歌いました。人間関係が破綻していた私の唯一の自己表現の場だったのでしょう。中学の音楽のテストで先生に褒められたこともありました。

合唱部は部員がとても少なく、先生の来られない日は雑談だけになるような部でしたが、私の支えでした。先輩もみな良い人たちでした。合唱部ではだんだん話せるようになっていきました。

一方クラスでは人間関係のいざこざに巻き込まれないために目立たないように行動していました。すでに、誰かが誰かに嫌がらせをしたなどという話を聞くと、幼稚でくだらないと感じるようになっていましたが。必要があつて話さないといけない場合は常にびくびくしていました。相手が私を嫌わない保証がないからです。学年が上がるごとに私に好意を持って接してく

れる人が現れましたがその人と接するのは特に辛かったです。傷つけないよう、嫌われないよう、神経を使っていました。これでは人が私を避けているのだから私が人を避けているのだからかわからない状態ですね。

せっかく私と仲良く付き合ってくれる人がいて私もそのことが分かるのに、「もしかしたら…」という思いがぬぐえない、それはとても相手に対して失礼なことではないのか。自己嫌悪が芽生えるのも不思議ではありませんでした。合唱部のメンバーが私のクラスでの様子を知ったらきっと驚いたでしょう。それだけのギャップがありましたから。

高校3年の時、私は体調を崩しました。鬱だと言われました。しかし最初の主治医が「2週間経たないときかない薬を処方したのに、1週間足らずで効いたから違うかもしれない」と言う医者だったので何が何やら。

正否はともかく、私は受験勉強を放棄せざるをえませんでした。2か月くらいずっと保健室に通い、寝ていました。ひどい時には座るときなどに体を起していられなかったり肉体的にも辛かったです。精神面の方が辛かったです。死にたくてたまらなかったですから。とにかくあらゆることを自己嫌悪につながる感じです。でも実行するだけの精神的エネルギーがありませんでした。親はさすがに心配していつでも自殺を止められるよう、しばらく私と同じ部屋で寝ていました。学校を休んだのは数えるほどです。実家は自営業で私を見ている余裕が無いために学校にいた方が安心だったのだと思います。教室に戻れるようになり高校生活も終盤を迎える頃には、人は相変わらず怖いですが好意的な人も含め彼らと何とか付き合えるようになりました。何がきっかけかは分かりません。慣れでしょうか。

大学ではサークルで初対面の同回生と話すのにとても勇気が要りました。今は仲良くやれています。しかし学部ではやはりあまり喋れずに現在に至ります。同じ学年の人の顔と名前が一

致していません。ろくにしゃべったこともないのに相手が私の名前を知っていて驚いたことさえあります。

鬱の方は良くなったり悪くなったりを繰り返して今に至ります。今、支援室に授業のことを助けてもらっています。もっと早く利用していれば大学生活ももっと楽に過ごせたでしょう。1度学部にも相談に行ったことが受け入れられず、1人で絶望していました。

親に就職活動をしていないことを告白しました。母だけですが。怒られはしませんでした。これで気兼ねなく卒論に没頭できます。親に対しては常に後ろめたい思いです。

こうやって書いてみると、前回の日記の「自己評価」は鬱状態の時の心情のような気がしてきました。今現在、あそこまで極端なことは考えていません。でもそういう気持ちが表れるということは常にどこかで思っているからだと思います。自己評価が低いことも事実です。それを考えることで悪循環が生じるかどうかの違いでしょうか。大学生活の様々なことと鬱状態が相俟って生まれたのでしょうか。

<その3>

就職活動に関しては、もうインターンシップが辛くて苦しくて仕方がなかった思いしかありません。鬱状態と重なったのです。自分と人を比べてしまい、仲良くもなれず、ミスに落ち込み、という有様でした。単位がもらえたという点では良かったです。

自分に就職は無理なのだと思います。過去形で書いているのは鬱状態の時の気持ちだからです。長く続いた鬱状態の期間中、本気で就職のことは諦めていました。ですから体調の良い今でもまるで自分のつきたい職業が思いつかないのです。それよりせつなく体調がいいのだから勉強に心血を注ぎたい気持ちです。4年目にして勉強に対する最大の意欲がわいているのです。

日記で書いた先輩の言葉は私の人生最高の賛

辞です。今まで私は小中高と成績のことと真面目である（そう見えただけです）ということでした。しか褒められませんでしたから、新鮮に思ったというか、より自分を買ってくれている気がします。

それにしても義務教育を受けて以降、辛いことの方が多い人生でした。改めて書き出してみても自分でも驚いてしまいます。辛いことだけをピックアップして書いているから、私が辛いことを特に覚えているから、とも言えるのかも知れませんが。

私がファンレターを送った漫画家さんも自身のブログで「生きていてずっと辛かった」「本や漫画や音楽が支えだった」と語っています。私と同じだと思いました。「自分みたいな人間の支えになれるような漫画を描きたい」のだそうです。

私は辛い思いを抱えてそれでもあがいている人に惹かれるのかもしれませんが。竹久夢二もそうですし。すぐ感情移入してしまうのです。太宰治が「人間失格」を書いた心境のことで悩んだ時期もありました。今は中原中也の「春日狂想」で悩んでいます。こちらは内容のことですが。

日記で散々語っている尾崎豊にしても例外ではないかもしれないです。彼が精いっぱい生きたという事実とその作品によって希望や勇気が湧くようになりました。5年ぶりに「再会」できて本当に良かったです。

彼は私の中では太宰治と中原中也と竹久夢二と宮澤賢治の中間のようなキャラクターとして認識しています。5人とも中途半端に知っている状態なので各方面から抗議が来そうですが。

もはや何を言っているか分からなくなってきたので終わりにします。（# 14,15,16）

長大な自伝的なものの語りは、何度か繰り返し日記のシリーズに現れたが、卒業直前の日記において、これまで語られなかった、「家族についてのもの語り」が生き生きと語られた。

[N10] 〈親について〉

眠れないので、こんな時間に書き込み。

親に対して複雑な感情を持っています。

保育所から小学校中学年くらいにかけて、家では思いつくままにものを言う子供でした。そのたびに「屁理屈を言うな」「変人みたいなことをいうな」と言われてきました。「そんなことを言うからお前には友達がないのだ」と言われたことも何度もあります。むしろ、学校では無口な子供だったのですが。

いじめられるようになって、当然、学校に行きたくなくなりました。子供なりにプライドもあって「いじめられるのが嫌だから行きたくない」とは言えないし、サボるのはやはり後ろめたいので、体調が悪い、と言って休もうとしました。中学時代の朝は、「熱がないのだから行け」「熱がなくても具合が悪い」と、母とよく格闘しました。

家族も私がいじめに遭っていることは知っていました。母は、いじめられたからといって学校を休んで、その分勉強についていけなくなつては損だ、という考えの持ち主でした。母もいじめにあつて、学校を休んだために勉強について行けなくなった経験があるので、こういう考えを持つようになったらしいです。

最後の手段として、よく学校を早退していました。学校から正式に電話がかかってくるのを、いくら親でも、突き返す訳にはいきません。ある日、早退したら、父にひどく怒鳴られました。「どこの人間がそんなことをしている」「近所の者はみんな楽しそうに学校に通っているのに」「自分だって、足が悪いのをからかわれていた（父は身体障害者で、ちゃんと手帳も持っています）」父にあんなに怒られたのは後にも先にもあのときだけです。世間体が大事なのだなと思いました。まあ田舎のことですから、仕方ない面もあるのでしょうけれど。

死ぬことをよく考えていました。でも、万が一失敗したら、と考えて実行はしませんでした。生き残ったら、自殺しようとしたことを怒られ

る、とと思いました。

高校に入って、いじめはなくなりましたが、学校で本当に具合が悪くなくても、家に帰るのが怖かったです。中学校でのことがあるので、具合が悪いことを信じてもらえないと思っていました。

過去の日記で書いたとおり、高校3年で鬱になりました。最初、母に「鬱かもしれない」と相談したら、「テレビとかの影響でそう思い込んでいるのではないか」と言われました。ちょうど鬱病の世間での知名度が上がっていた時期でした。保健の先生が、電話で、私の状態を家族に説明してくれました。

今年の前期、O先生の授業で、弁護士の大平光代さんの『だからあなたも生きぬいて』という本が紹介されました。昔、家にあつたので読んだことがある本です。著者も激しいいじめを受けた人です。O先生は「不登校は、避難なんだから」と言いました。「子供にとっては、学校と家しかないですからねえ」と私が言うと、先生は大いにうなずいていました。O先生みたいな人が親だったら、こんなに苦しまなかつたかもな、とと思いました。

私は長女で初子なのですが、今年のいつだったか、帰省したとき、母に「悪いけど、第一子は試作品みたいなもの」と言われました。傷つきはしませんでした。ただただ、呆れました。おいおい、というかんじ。父には、「鬱というのは、考えすぎでなるんだろう」と言われました。幻滅しました。「考えすぎ」とか、「気にするな」とか、この上なく無責任な言葉だと、私は思います。

親も、軽度の発達障害をもつ弟のことで大変だったのだと思います。弟は、友達にけがをさせたとか、物を壊したとかで、よく学校から電話がかかってくるのでした。そんな弟も、内定が決まったようです。

実家に帰ると、すぐくわがままになってしまいます。甘えです。でも、距離を置いた分、落ち着いて話せるようになった部分もあると思

ます。

今年は卒業できないかも知れないと、電話で母に言いました。「お金を出さないと言ったら、どうする？」と言われました(実際、うちには余り余裕がありません)。「私のこと、嫌いなんでしょう」と、返しました。「何を馬鹿なことを言っているの」と言われました。

三島由紀夫は、「教師は、乗り越えるのが最も簡単な壁」といいます。じゃあ、親は？大学には、親から自立したくて来た部分もあるのに、今更、どうして、昔の親の言動を思い出して泣いているのでしょうか。(＃46)

H) カテゴリー8：誘発される自己語り

A子さんの印象的な伝記的な語りに対して、それに誘発されるかのように、支援者からの自己開示的なコメントがなされるようになった。こういった支援者の自己語りは、A子さんと支援者間の濃密な転移／逆転移を誘発する可能性もある。しかし、実際の支援構造の中で、このような濃密な関係性がA子さんの状況を不安定にさせることは経験されなかった。

[R6] 〈[N9] への応答〉

A子さんの世界がとても伝わってきました。繊細で、きれいで、辛い中でも一生懸命に生きてきて…A子さんの人生のストーリーに、自分の昔を思い出しました。

父親が転勤族だったので、2～3年で転校し、お陰で深いつきあいをする友人ができなくても平気になったものです。

高校生の頃、「友達はいらない」と決心して、誰とも話さないようにしていた自分を思い出しました。話さないようにしていると、話せなくなるもんだなあと思ったことがありました。確かその頃、一番本を読んだ記憶もあります。歩きながら読みましたから…。

記憶の中の人生と記憶に残っていない人生があり、どちらも私の人生なのでしょうが、記憶の中のストーリーは、確かな実感のある人生で

すよね。

[R7] 〈[N10] への応答〉

A子さん、小さい頃の、A子さんのことを書いてくれてありがとうございます。

いじめは本当に残酷です。絶対にあってはならないことだと思います。でも、なかなかその辛さが伝わらないことも多く、実際にいじめに遭っていることも達は孤立してしまい、苦しい思いをするのだと思います。

大平さんの本は、ご本人の立場からご自身の人生を通して、本質を伝えてくれた貴重な一冊ですね。

「発達障害」とは、限りなく一般の多くの人々とその特性が連続しているものです。弟さんも、結果的にお友達に怪我をさせたり、ものを壊したりしてしまったのでしょうか、きっと弟さんなりの理由があったはずです。気持ちをわかってくれる人がゆっくり話を聞いてくれると、安心でき、我慢する耐性もできると思っています。

私はカウンセリングの他に、発達障害の教育も専門とする人間ですが、衝動性を持つ人たち、それから、コミュニケーションの困難さを持つ人たちの、素敵な一面もよく知っています。発達障害は、困難さの後ろに隠れてしまっている良い面を一緒に見つけ出し、生活の中で活かしていくことから自己理解が始まります。内定が決まった弟さん、本当におめでとうございます。

A子さんが、ご両親と「距離を置いた分、落ち着いて話せるようになった部分もある」と思えること自体、大学に来た大きな意味があると思います。

私個人としては、「親を乗り越える」という感覚より、「親と距離を取る」感覚の方が、何となくぴったりするような実感を持っています。

I) カテゴリー9：自己アイデンティティの語り 支援期間の全体を通じて、A子さんは、「自分

は他者からどのように思われているのか？」という問いへの回答となるような、思いもかけないできごとを繰り返し体験し、そのたびに「驚きと戸惑い」を強く感じたことをくりかえし日記に表現した。このような経験とその振り返り記述は、しだいに、「自分とは何か」「自分の将来はどのようなものか」という自己同一性への問いへと変化していった。Aさんの場合、「自分の表現する文章が他人に影響を与えること」は、まさに驚きの体験であり、その実感から自分自身を逆照射することによって、次第に自分とは何かという問いに接近していくさまが見て取れた。

[N11] 〈日記を書くこと〉

まとめられないかもしれませんが御容赦を。

日記を書き始めるようになって、コメントをいただいたり、保健管理センターなどで話題にされたりすることが増えました。

そういうときに自分の全く意図しなかった反応が返ってくると内心とても驚き戸惑ってしまいます。自分では深い考えもなく言いたいことや思いついたことを書いただけのつもりの場合なおさらです。

私は模試での酷評にうんざりして小論文のない一般入試を受けたような人間ですから、私の文章力の問題ではない気がします。(思えば小説を読んでいれば文章力がつくということを盲目的に信じていた時期がありました)

言葉には影響力があるのは知っていたつもりでしたが、自分の書いたものにそれがあるとは思いませんでした(それはそれで愚かなことですね)。念のため言いますが、謙遜などではないです。

なにとはともあれ自分の書いたものでも人に影響することを知ってしまったからには、私は慎重に言葉を選んでわかりやすく書くことを心がけるしかできません。個人的に誤解がとても怖いので、そのことは苦ではありませんが。コメントはうれしいので、これからも気軽にしてくださいね。(＃19)

[N12] 〈故井上ひさし〉

この本に触発されて書いてみました。岩手県一関での講習会のもようを収録した本です。参加者は「悩み」というテーマで400字の文を書いていたので私も同じテーマで。400字という制約の中で書くのは難しかったです。辞書を何回かひき、1文を足したり削ったりしました。

どうやら私には文才があるらしい。PSNSの日記で好きな歌手について語ったら、ある人が「読み手との橋渡しとなりうる文章だ」との評価をくれた。同じく回想録のようなものを書いたら「繊細で美しい」と感想をくれた人があった。自分には取り柄がないと思っていたから、青天の霹靂だった。

激しい劣等感を抱くようになったのはいつからだろう。確実に言えるのは小中学校でのいじめと友達ができなかったことが私に影のようにつきまとっているということだ。学校の成績は良かったが、心の支えになつてはくれなかった。成績の良さへの誇りを、感じる間もなく押しつぶす。二つの経験はもう血肉といっても良いくらいだ。

文章を褒められたことに対しては、喜びより驚きや戸惑いのほうが強い。思うように書いただけなのだ。しかし、もう劣等感に捕らわれるのに疲れているのも事実だ。文章力が本物ならば、生かす術はないものだろうか。(＃23)

自分とは文章を表現することができる存在である、という体験は、A子さんにとって、肯定的な自己アイデンティティの核となる可能性をもつものであり、それはA子さんにとって、それまでの「劣等感のみ」の自分から脱出する道を示すものとなった。しかし、「自分とは何か」に対して確立した答えを創出することは容易なことではなく、その後の日記では、「自己概念」の周りをめぐりつつ、さまざまなアイデアに言及するものの、「何を表現したいのかわからなくなる」という結論で終わる日記が断続的に書かれることになった。

タイトルの変遷がそれをよく反映している。

[N13] 〈人間関係〉

たとえば、先輩と後輩という関係だったら、あるていど自分の言いたいことを言えるし、しちやいけないこともわかるようになりました。高校と大学の部活動のたまものです。部活内にも、やっぱり同級生はいるわけで、さいしょのうちにはびくびくしながら接していました。変な人間だと思われて、排除されたり、敬遠されるのが怖かったです。手探りでしたが、今は楽に接することができます。

学部のコースの同級生は、わたしにとっていちばん困る存在です。彼らに対し、どうふるまえばいいかわかりません。（「彼ら」と呼んでいるあたり、私が何の感情も持っていないことの表れだなあとします。）授業に出ない私の名前を覚えていたのには、すごく驚きました。親しそうに話しかけられると、最低限の受け答えはしますが、内心混乱しています。

矛盾していますが、敬遠してくれたほうが楽です。それが昔は常態だったもので。

先週、卒業アルバムのために、コースで写真を撮りました。みんなが見ているところでしたが、作り笑いが意外とうまくいったのでよかったです。全員参加ではない撮影は、逃げるように帰ってきましたが。

文が整理されていないし、だいぶわがままなことを書いているなあ。

頭がボーっとしているせいだと思ってください。（#31）

[N14] 〈タイトルが思いつかない〉

水曜日は卒論の中間発表でした。

急ごしらえのレジュメでの発表でした。先生に、「あなたは小説を描くのが得意なんだから…」と言われました。もちろん見せたことがあるので、この先生の口からこのセリフが出ることはおかしくないのですが、正直、やめてほしかったです。とっさに下を向いてしまいました。

からかったわけではないとわかるのですが、自分のことをほめられると本当に恥ずかしくなりません。ましてほかの先生も、同じコースの人もいる場です。

合唱の講師の先生に、「あなたはこれから、歌えば歌うほどうまくなる」といわれたり、私の顔を指して、「えらの張り方が私と同じ。声がよく響く」

といわれたりしたことがあります。照れくさかったけれど、うれしかったです。「歌えば歌うほどうまくなる」という言葉には、ちょっと舞い上がってしまったくらいです。

この違いは何なのでしょう。（#41）

[N15] 〈no title〉

最近頭がボーっとするというか、まわらないというか…。

去年の今頃も同じような状態でしたけど。昔あつたいやなことはやけに思い出します。まじめだまじめだと、小学校1年のころから教師からはよく言われてきましたが、ただルールとか、言いつけを破るのが怖かっただけです。道徳心が強いとはいえません。臆病なだけです。罰を受けたり、恥をかいしたりするのが怖いだけ。昔はそこまで考えませんでした。まじめだといわれるたびに、「なんか違う！」というのはわかっていました。

高校3年の模試で、最後の科目の、制限時間がくるまで帰ってはいけないことになっていました。あっさり破りました。緊張も罪悪感もありませんでした。

翌日、ホームルームで担任はちょっと怒鳴りましたが、深い追求とか、名指しでの注意はありませんでした。名簿順に席に着いていたから、誰が帰ったかわかったはずですが。「こんなもんか」というのが感想。正直、呼び出されたりするかな、とドキドキしていましたが。

何でこんなことを書いているのでしょうか。

思い出すだに、あまり教師に恵まれたとはいえない…。

その他もろもろをふくめて、未だに引きずっています。未だに自己評価は低いです。子供はかわいそうだと思います。「なんか違う！」というのをうまく説明できないからです。

私はこの年になって説明できるようになって、だいぶ楽になりました。矛盾するようですが、その代わり辛いことも増えましたね。「ああ、あのときのあれは嫌なことだったのか」と自覚するようになりましたから。

あー、就職に向けて、自己分析しなきゃいけないでしたっけ。自己評価の低い人間の自己分析なんて、ネガティブなものになりそうです。ポジティブすぎるのと同じく、客観的とはいえない。

それはさておき、「故・井上ひさし」というタイトルの日記の、400字の文、自分でも良いと思います。完璧な自画自賛ですが。ああいうのは、どこかで生かせないのですかね。変な日記になってしまいましたが、人に会うのがつらくならないうちは、まだ大丈夫だと思います。(＃45)

A子さんは、さまざまな体験やさまざまな思考を色々な角度から表現し、それを読み返し、さらに支援者と交流する中から、これまでの自分、今の自分を「私はこの年になって説明できるようになって、だいぶ楽になりました」と語った。自己アイデンティ探索の旅には終わりが無い。

J) A子さんと支援者の相互交流のプロセスのストーリーライン

A子さんは、保健管理センターでのカウンセリング、トータルコミュニケーション支援室における支援を継続して受けていたが、社会への参入を目の前にして、複数の発達課題をクリアする必要があった。PSNS日記を利用することにより、A子さんがもともと持っていた「省察的な文章を書く能力」を適切に展開させる場が与えられた。A子さんの日記は、まず「ためらいがちのクレーム」の表現から開始され、支援者はそれを全面的

に「有効化」する肯定的応答を繰り返した。支援者からの肯定的応答に支えられて、Aさんは、自らの「好きなもの語り」を展開させ、次第にその語りは双方向的な「往復書簡」の形式をとるようになった。支援者との相互交流に促進され、A子さんは複数の「気付き」を明確に表現するようになった。支援者はそれに対して「気付きの共有」を心がけた。A子さんは、「好きなもの語り」を展開的に語るとともに、それを「自伝的もの語り」へと結晶させ、そこには過去の辛い体験を「書く作業」の中で再体験することが含まれていた。A子さんの印象的な語りにも触発され、支援者は「誘発された自己語り」を交錯させ、濃密な交流が展開した。そのようなプロセスからさらに新しい気付きが生まれるとともに、螺旋状に進展する「自己アイデンティティの語り」へとつながっていった。「自伝的もの語り」は、さらに大きな課題である家族との歴史の物語を変容させる「家族もの語り」を構成することができるようになり、それは現実の家族との関係の変容にもつながっていった。支援者の働きかけとしては、「有効化」「共有」「誘発された自己開示」等の応答を丁寧に繰り返すことにより、「共感的な目撃者(empathic witness)」の役割を担い、支援システム全体が、「変容の容器」として作用したものと思われる。

4. 総合考察

A子さんの診断については、高校生時の主治医によって非公式に「アスペルガー症候群」の可能性が示唆されているが、公式な病名・障害告知はなされていない。大学生における発達障害の確定診断はしばしば困難を伴うが、A子さんの場合、4年間の支援を通じて、「障害名」あるいは「病名」が支援上の重要な話題として浮上することはなく、支援者は「高機能発達不均等」としておおざっぱにカテゴリー化するに留め、もっぱら本人の支援ニーズに焦点を当てつつ関わった。

A子さんは、face-to-faceの面接場面では、一見無表情で言葉が極端に少なく、外見からは何を考

えているのかを読み取ることが難しいという印象を受けた。しかし、応答はゆっくりであっても質問には必ず答えてくれるという安心感を、支援者側は感じる事ができた。そのような中から、Web支援システム（PSNS）に、自発的に日記を書くというツールを得たことが、A子さん自身の「物語を通じての自己表現手段」を開花させることにつながったと思われる。

一般に発達障害が論じられる時、「障害」という概念の持つ「人生の早期から持っている特性であり、それは一生涯変化しない」という側面を強調しすぎるならば、「発達障害の人は成長しない」という安易な結論に結びついてしまう。しかし、少なくとも大学における発達障害支援を実践している者の多くは、「彼らは自らの経験を言葉にして語り、他者と共有することを通じて変容（成長）していく」という実感を持っている。このような「成長の過程」は、物語の共有を通じた経験的学習（Greenhalgh & Collard 2003）と密接な関連を持っていると考えられる。

また、Charon(2006/2011)によれば、物語性（narrativity）は、ポストモダンにおける自伝理論の顕著な特徴であり、「自己同一性（identity）は、物語によって宣言されると同時に創造されるものでもある」とされる。また近年の自伝に関する理論においては、他者との関係は以前に比べてはるかに重要なものとされるようになってきた。個人的に解釈される自己という西洋的な概念に対する一枚岩的な忠誠心は、関係性によって創造される自己の実現という考え方によって置き換えられるようになったという点をCharon は強調している（p109）。

コミュニケーションに困難を持つ、あるいは自身がコミュニケーションに困難を感じているクライアントがなぜ自己肯定感の欠如に陥るかについては、著しい個別性があると思われる。Aさんの日記において次第に展開していったように、自己同一性の語りは、「書く／読む／応答する」という相互交流的関わりと自省のプロセスを経て、螺旋状に周回しながらすこしづつ明確にされていく

ものと思われる。そのプロセスは必ずしも一定の到達点を持つとは限らず、むしろ語り続けること、応答すること/されることのプロセスそのものが、否定的でないアイデンティティを紡ぎ出していくのではないかと想像される。

<附記>

本論文の研究内容は、2009-2011年度文部科学研究費基盤研究C(21530720)「物語共有による発達障害大学生の経験的学習の推進－Web支援システムの構築－」の助成により行われた。本論文の作成に多大な協力をいただいた、西村優紀美准教授、吉永崇史特命准教授、TCSI専任スタッフの桶谷文哲、水野薫、松谷聡子、米島博美、石村恵理の諸氏に感謝します。

<文献>

- Charon R (2006) Narrative Medicine－Honoring the Stories of Illness. Oxford University Press Inc., USA. (斎藤清二, 岸本寛史, 宮田靖志, 山本和利訳 (2011) ナラティブ・メディスン－物語能力が医療を変える－. 医学書院.)
- Greenhalgh T, Hurwitz B eds. (1998) Narrative based medicine－Dialogue and discourse in clinical practice-. BMJ Books, London. (斎藤清二, 山本和利, 岸本寛史監訳 (2001) ナラティブ・ベイスト・メディスン；臨床における物語りと対話. 金剛出版.)
- Greenhalgh T, Collard A (2003) Narrative based healthcare－Sharig stories : A multiprofessional workbook. BMJ Books, London. (斎藤清二訳 (2004) 保健専門職のためのNBMワークブック－臨床における物語共有学習のために－. 金剛出版.)
- Greenhalgh T (2006) What seems to be the trouble?－Stories in illness and healthcare. Radcliffe Publishing Ltd, Oxford. (斎藤清二訳 (2008) グリーンハル教授の物語医療学講座. 三輪書店)

- 木下康仁 (1999) グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生. 弘文堂.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂.
- 斎藤清二, 岸本寛史 (2003) ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践. 金剛出版.
- 斎藤清二 (2005) 質的研究 心療内科9 (5) 328-333.
- 斎藤清二 (2008a) 「オフ」と「オン」の調和による学生支援—発達障害傾向をもった大学生へのトータルコミュニケーション支援—. 大学と学生60 (通巻534) 16-22.
- 斎藤清二 (2008b) ナラティブ・ベイスト・メディスンと臨床知—青年期慢性疼痛事例における語りの変容過程. やまだようこ編 質的心理学講座2—人生と病いの語り. 東京大学出版会 p133-163.
- 斎藤清二, 西村優紀美, 吉永崇志 (2009) 富山大学アクセシビリティ・コミュニケーション支援室 (H-A-C-S) の取り組み. 大学と学生 75 (通巻549) 20-24.
- 斎藤清二 (2010) 高機能発達不均等大学生への支援—ナラティブ・アプローチの観点から—. 学園の臨床研究9 : 1-12.
- 西村優紀美 (2011) ナラティブ・アセスメント. 斎藤清二, 西村優紀美, 吉永崇志 (共著) 発達障害大学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント— 金剛出版, p44-67.
- 吉永崇志, 斎藤清二 (2010a) システム構築と運営のためのナレッジ・マネジメント. 斎藤清二, 西村優紀美, 吉永崇志 (共著) 発達障害大学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント—. 金剛出版 p68-108.
- 吉永崇志, 斎藤清二 (2010b) 富山大学P S N S を活用したオンライン学生支援. 富山大学総合情報基盤センター広報7 : 14-17.